帰国報告

チューリッヒ日本人学校での勤務を終えて

前　チューリッヒ日本人学校　教諭
現　千歳市立青葉中学校　　教諭　　桂川　淳

１．はじめに

３年間の在外教育派遣施設への派遣は、本当にあっという間でした。振り返るとずいぶん遠い昔の出来事に感じるほどですが、そのときの記憶や人々の様子、町の雰囲気など、今なおくっきりと目に浮かび、懐かしく思い出しています。

帰国後の４月から、これまで当たり前に見ていたものが不思議だったり感心したりと、新しい視点を得て生活しています。自分が研修してきたことを報告したり、伝えたりする機会は少なく、伝え方の難しさを感じることも多いのですが、このような形で研修を報告できる機会を与えていただいたことに感謝申し上げます。

２．スイス連邦の概要

■国名

後述するが、スイスは多言語国家であるため、正式名称をいくつかの言語でもつ国である。日本外務省では、スイス連邦（Swiss Confederation）の名称となっている。

スイス本国では、ドイツ語名が Schweizerische Eidgenossenschaft　となるが、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語でも国名をもつ。特にラテン語の Confoederatio Helvetica は頭文字の CH で一般的に使用されることが多く、さまざまな正式書類、車のナンバーなどで見かける。

一般的には、女性定冠詞を付して“die Schweiz”という通称をもち、国民やドイツ語圏の方はそのように表記、発音する。

■面積

九州本島よりやや大きく、41,290km²。例えば、チューリッヒからフランス語圏のジュネーブまでは、高速道路を利用して片道４時間半程度である。

■位置・気候

スイスはヨーロッパ中央部に位置する。

面積の 96%の 39,770km²が陸地である。周辺には東にオーストリアとリヒテンシュタイン、南にイタリア、西にフランス、北にドイツと接する。

スイスは南のイタリアとの国境近くにアルプス山脈がそびえていることでも広く知られており、その北側には国の中央を東西にわたる台地が広がっている。国民の大半はこの台地（スイス高原）上に住んでいる。

アルプス山脈の影響で、同じ国でも天候が北と南では大きく違う。（西岸海洋性気候、地中海性気候、高山気候）

チューリッヒは海洋性気候である。雲によって夏は涼しく、冬は穏やかな天候である。（平均気温：9.4℃。年間降水量：1129.6 ㎜）

北海道札幌市の平均気温が 8.9℃、年間降水量が 1106.5 ㎜なので、比較的札幌市と似ている天候である。

中央ヨーロッパの夏時間を採用しており、3 月の最終日曜日午前 2 時（=夏時間午前 3 時）から 10 月の最終日曜日夏時間午前 3 時（=標準時

午前 2 時）までの期間、適用される。例えば、10 月は朝まだ暗い中で出勤し、夕方にはもう真っ暗となる。また、夏時間採用の 7 月頃には、21 時でも夕暮れのような雰囲気で、小さな子どもが外で遊んでいる姿を見ることもしばしばあった。

■人口

787 万人（2010 年、スイス連邦統計庁）

ほぼ同じ面積の九州本島に暮らす人は約 1,314 万人。スイスは、人の少ない、ゆったりとした印象を受ける。

■首都

人口約 12 万人のベルン（2010 年、スイス連邦統計庁）

■言語

独語（64%）、仏語（20%）、伊語（6%）、ロマンシュ語（1%）

（2000 年、スイス連邦統計庁）

チューリッヒはドイツ語圏であるが、大人から子どもまでいわゆるスイスドイツ語を話す。数字の数え方、特有のドイツ語、独特な発音をするなどの特徴がある。

■民族

主としてゲルマン民族　（外国人約 20%）

■政治

連邦共和制で、26 の州（カントン）により構成される。

それぞれの自治が確立されており、税制や教育などは地域ごとに異なっている。

連邦議会は二院制＜上院（全州議会）46 議席、下院（国民議会）200 議席＞。選挙は 4 年ごとに行われる。

内閣は、連邦議会によって選出される 7 人の閣僚で構成され、それぞれ各省の大臣を務め、その中の 1 人が大臣兼任のまま、任期 1 年の大統領となる。スイスの大統領は、閣僚 7 名が 1 年ごとに交替で務める輪番制である。（毎年 1 月 1 日に就任）。

スイスは直接民主制が浸透している。主として、イニシアティブ（国民提案制度）とレファレンダム（国民投票制度）の 2 つの制度からなる。

2001 年 3 月には、 国民投票で EU 加盟のための早期交渉開始を否決している。

2002 年 9 月、国連加盟を国民投票で可決（190 番目の加盟国）した。

他にも、ミナレット（モスクに付随し、礼拝時刻の告知を行うのに使われる塔）建設の是非、一般市民の拳銃保持の是非なども、在任中に国民投票で審議された。

３．日本との関係

1864 年に修好通商条約を締結するなど、伝統的に友好関係にあり、2014 年には、両国間の国交樹立 150 周年となる。

2009 年 9 月に両国間で、往復貿易額の 99%以上を占める物品の関税を発効 10 年以内に撤廃する、経済連携協定を結んで以来、経済交流が盛んになっている。

○日本からスイスへの、主な輸出物品

機械類（電気機器除く）（10.1%）、
自動車（7.1%）、医薬品（5%）、金（4.7%）、
電気機器（3%）
化学製品（医薬品除く）（2.8%）

○スイスから日本への、主な輸入物品

医薬品（32.2%）、時計（18.3%）、
化学製品（医薬品除く）（12.3%）、
葉巻たばこ（9.7%）、一般機器（7.8%）、精密機械類（時計除く）（6.9%）、
電気機器（4.6%）

在スイス日系企業は約 130 社で、主な進出先はチューリッヒ、ジュネーブである。商業（卸売業）中心で、製造業は少ない。投資先としてのスイスは、欧州の中心部に位置するという地理的利点、語学に堪能で勤勉な国民性、低い法人税率、柔軟な労働法制等が魅力といわれている。

在留邦人数は、8,557 人（2010 年 10 月現在）。特にジュネーブとチューリッヒに日本人が多く暮らし、日本語補習校で日本語を学ぶハーフの児童生徒が年々増加している。

４．各種調査から見るスイス

□2010 Quality of Life Index

3 位　スイス（1 位フランス、36 位日本）

世界の 194 の国と地域の生活費、経済、治安、天候などの指標を採点し、ランキング化したもの。

□物価が高い都市ランキング

2 位　　チューリッヒ

（1 位オスロ、3 位東京）

食料、衣服、家電、生活用品、住居、公共交通機関、レストラン/ホテル、レジャー、サービスの 9 分野 122 品目の物価を指標値化したもの。

□世界のビッグマック価格ランキング

4 位　　スイス 513 円

（1 位　　ベネズエラ 620 円

16 位　　日本 320 円）

□国際競争力(WEF)ランキング

1 位　　スイス　（10 位　　日本）

「競争力」を一国の生産力のレベルを決定する諸制度、政策、諸要因の組合せであると定義。

□世界　都市別月給ランキング

2 位 チューリヒ 465,700 円

（15 位 東京 314,600 円）

□WHO 平均寿命・男女国別順位

スイス男子２位　80 歳　女子７位　　84 歳

（日本人の平均寿命は、男性が 80 歳

女性が 86 歳）

５．スイス　チューリッヒ州の教育

幼稚園（Kindergartenstufe）2 年

小学校（Primarstufe）6 年

中学校（Sekundarstufe）3 年

が義務教育である。

チューリッヒ州の実験的な試みとして、ベーシックコースを置くシステムがある。2 年間の幼稚園と小学校 1 年を合併し、コース入学後「発達の早い児童」は 2 年後に小学校 2 年に編入する。「発達の平均的な児童」は 3 年後に小学校 2 年生に、「いくらか緩やかに成長する児童」は 4 年後に小学校 2 年に編入する。（遅くとも 8 歳で小学校 2 年生に編入することになる）

小学校 6 年修了後、中学校またはギムナジウムに分かれる。

ギムナジウムを希望する場合は、試験（ドイツ語・数学）に合格しなければならない。

中学校はその学力レベルによって 3 つに分かれている。教師の推薦判断により、学力に応じた中学校へ進学している。

○チューリッヒ州の授業時数

授業は Mensch&Umwelt(人間と環境)、Sprache（言語）、Mathematik（算数）、Gestaltung und Sport（図画と体育）に分かれる。

「人間と環境」は「歴史・地理・自然・技術と生活」をその内容とする。

Handarbeitsunterricht(工作)は 2 年から開始

される。

Schwimmunterricht（水泳）は小学１年から４年まで、週１回実施される。

１単位時間 45 分で、7:30～17:45 が授業設定時間である。

州の教育ホームページには「宿題は授業を補うものである」とし、「宿題は両親の助けなしに解決すべきものである」と書かれている。

○日本と違う特徴的な点

・「道徳」の科目がない。

・朝の会や帰りの会、掃除、給食などがない。昼食時は家庭に帰る。準備ができない家庭も増えており、そのさいは学校の一教室で食事を有料で提供する学校も増えている。

・図画工作の時間が日本に比べて多い。ものづくりや作業の中で体験・豊かな発想をもたせることを重視している。

・言語の学習が小学校から盛んである。（英語教育に力を入れている。また小学５年からはフランス語が必修となる）

・学校の役割は「教科指導」「集団生活指導」に集約される。下校後の生活指導は家庭における責任という認識である。

６．チューリッヒ日本人学校の概要・特色ある教育

◇教育目標

自ら学ぶ意欲と学ぶ楽しさを味わわせ、自他を思いやる豊かな心を養い、国際社会にたくましく生き創造性豊かな子どもを育成する。

◇目指す子ども像

◎ すすんで学習にはげむ子（知育）

◎ 思いやりのある仲のよい子（徳育）

◎ 明るく強くきたえる子（体育）

◎ スイスの友と学びあう子（国際理解）

◇基本方針

◎ 「行ってよかった・行かせてよかった」と言っていただける魅力ある学校づくりに努める。

◎ 互いに切磋琢磨し「働いてよかった」と言える学校を目指す。

◎ 目指す学校像

楽しさ・やる気いっぱいの学校

美しい学校真剣な授業

さわやかな挨拶大きな歌声

◇児童生徒数（2012.3 月時点）

小１・４名　小２・１名　小３・２名

小４・２名　小５・１名　小６・１名

中１・１名　中２・１名（計 13 名）

☆語学授業の充実

小学校１年生から、ドイツ語と英語を必修とし、週当たりの時間数は以下の通り。

小１～３　ドイツ語２・英語１

小４～６　ドイツ語２・英語２

中学部　　ドイツ語２・英語５

ローマ字の使用に困難のない児童がほとんどである。授業での学びの成果である一方、暮らしの中で文字を見ているのもその一因と感じる。

☆講話会の実施

スイスで活躍される各界の方々を招いて、児童生徒や保護者を対象に年３回程度実施する。

派遣期間中、大学の講師を招き植物について学んだり、音楽やスポーツの分野で活躍される方々と直接ふれあったり、本物を見つめる時間の設定は、児童生徒の気持ちをゆさぶる充実の時間となった。

☆課外クラブ活動

毎週火曜日と金曜日、6 校時終了後から 17 時（夏時間）まで、クラブ活動を実施している。小 3 から中 3 までの希望者が集まり、サッカーやマット運動、卓球など、話し合いで種目を決定しながら、自主的に運営している。発達段階が違うため、上級生にとっては難しい活動になることもしばしばあるが、リーダー性やホスピタリティが育つよい時間である。

☆ゼクセロイテン

チューリヒ伝統の春祭り。かつて時計がなくミュンスター寺院の鐘の音が人々に時を告げていた頃、夏季の労働時間の終わりが 6 時だったことから、春の到来を意味する祭りとして 6 時（Sechs）の鐘の音（Läuten）と名づけられた。

最終日の月曜、高さ 13m の薪の山に立つ藁でつくった大きな雪だるま “ベーグ Böögg”を 6 時の鐘（ゼクセロイテン）とともに燃やす儀式で、祭りはクライマックスをむかえる。

このお祭りに、補習校と合同で参加している。馬車の上に太鼓演奏児童生徒が乗り、国旗やお菓子を沿道の見学者に提供するなどしながら、街の中心を行進する。

派遣 3 年目に引率者として参加させていただいたが、この年は 3 月に東日本大震災があったため、とりわけ大きな声援をいただいた。

☆補習校との合同運動会

運動会は、併設する日本語補習校の児童生徒、スタッフの方とともに共催の形で実施される。市の陸上競技場を使用し、「徒競走」「借り物競争」「綱引き」「玉入れ」「大玉転がし」「リレー」などを行う。スイスには「運動会」がないので、来られるスイス人の保護者の方には新鮮で日本的な行事に見えると聞く。

開会式や閉会式で並んでいる姿も、日本的で印象に残るという。

☆サマーキャンプ（小 3 以上の宿泊研修）

小 3 と小 4 は 1 泊で途中から参加、小 5 以上は 2 泊するサマーキャンプ。いわゆる旅行的行事の扱いだが、小 3 から学校行事で一泊するのは、日本ではほとんどないのではないか。（冬にはスキー教室で、小 3 以上はスキー場で二泊する）

全体で登山をしたり、バーベキューをしたり、クラス別で自主計画をたてて研修をしたりと、スイスの自然をじっくり味わうよい機会となっている。

小 1 から中 3 までと在籍の長い生徒が以前は多くいたため、毎年開催場所を変えていた歴史をもつ。近年は短期間の在籍児童も増えたため、3 カ所程度をローテーションで回る方向で実施している。

引率者は何度も下見を行い、安全や場所の見極めを繰り返す。チケット購入、電車やバスの利用など、言葉の問題もあるため、何度もシュミレーションし、児童生徒が安心して研修できるよう配慮している。

☆学習発表会

秋には全日制の児童生徒だけで学習発表会を実施する。２週間の特別日課を経て、クラス発表や全体音楽発表を、土曜日の午前中に体育館で行う。

年々児童生徒が少なくなっていく中で、よい質のものができるよう、丁寧な配慮が必要な行事である。

在スイス日本国大使館からご来賓の方をお迎えし、生徒もスタッフも緊張する行事となる。

昔話、狂言など、日本の雰囲気や空気感が伝わる題材を実施し、児童生徒に達成感を味わわせる機会とすることができた。

〇百人一首

日本で勤務していたときよりも、日本的なものに取り組むことが多かった派遣期間。その代表的なものに、「百人一首」があった。１月に「百人一首大会」を伝統的に取り組んでいたが、派遣初年度はその取り組みを各学級にゆだねる従来の方法を踏襲していた。２年目には、小学３年生から始める困難さを見て、国語科の授業の中でこつこつ学習したほうが、暗唱も進み、古文に親しむ態度も養えると考え実践した。年々、暗唱する児童生徒が増え、大会も大いに盛り上がるようになった。「百人一首」を学ぶことにより、言語感覚が豊かになると感じる。例えば小学３年生の児童は、暗唱だけでなく、意味や内容をつかみ、言葉から意味を想像することを難なく行うようになっていった。授業だけでなく、ご家庭での支援、応援により意欲や技術が向上していることも付言したい。

百人一首のほかにも、太鼓演奏、もちつきなどの機会が大変多くあった。日本を見つめる、日本について考えるというのは、日本で暮らしていたときよりもその機会を得た。在籍した児童生徒も同様だったように感じる。

〇日本語補習校との連携

派遣教員の職務の一つに、「日本語補習校スタッフの支援と連携」がある。チューリッヒ日本人学校には、土曜日のみ開校する補習校が併設されおり、そのスタッフの方と出会ったことは、大いに刺激になり、研修の深まりを感じさせてもらう機会となった。

土曜日に同じ校舎を使用して開設される日本語補習校には、200 名近い児童生徒が通学してくる。平日は母国語であるドイツ語を使って現地の小中学校に通っているが、日本語を第二言語として学びたい、学ばせたいというご家庭がほとんどである。上級生になるにしたがい、第二言語とは思えないほど、しっかりとした日本語力をもつ生徒が目立つ。

補習校小学部では、日本語を学ばせながら、日本の教科書を読ませるという難しさにスタッフは対峙している。

微力ではあるが、スタッフの授業支援、自らの授業公開、教材観の交流などを重ねた。

補習校スタッフの方は毎週土曜日勤務することになるが、一つの授業を作るためのきめ細かい計画と丁寧な準備、保護者一人ひとりの願いやニーズに沿った支援を行っていた。

国語の授業づくりに頑張っている姿に、何度も励まされ、刺激を受けた。アドバイスを求められた分、自分も研修を重ねたものを提供する義務も責任もあり、文部科学省のホームページや学習指

導要領などを何度も確認したことは、今の自分の財産となっている。

7．スイス生活について

スイスは比較的治安がよく、特に私が暮らしていた町では、ご老人がのんびり歩いている姿をよく見かけた。夜に電車に乗る機会があったが、整然と、落ち着いた雰囲気は終始変わることがなかった。この治安のよさは、国の豊かさとつながっているように感じる。

豊かな国であるが、その生き方は無駄なものを省いた、質素なものである印象をもつ。スイスの一般的な家庭では、休日に登山や散歩に出かけることが多く、のんびりと過ごす。夜ご飯は温かいものはあまり取らず、パンやチーズ、昼ご飯の残りなどで済ますことが今でも多いという。

携帯電話やアメリカのファストフード店の普及、休日開店するお店が少しずつ増えるなど、その生活に変化の兆しはあるものの、ぜいたくは極力排したいわゆる古き良き時代がまだそこにあるように思う。

スイスの休日は本当に静かである。スーパーも日曜日や祭日は休業であり、まさに休息の日となる。住宅での暮らし方も、日曜日はいつもよりもさらに静かに暮らすことを求められる。共用で使用している地下の洗濯機も、日曜日は使用不可である。

スイス人は、慎重な方が多い。陽気に知らない人に話しかける、という方は稀である。ただ、お互いにコミュニケーションを会話でとるという文化は定着しており、スーパーのレジ、病院の待合室、エレベーター内の一室などで、見知らぬ者同士が挨拶を交わすのは日本では見かけない場面である。別れるときに交わす「よい一日を」「ありがとう。あなたもね」という会話が、見知らぬ者同士でできることが、いとおしく、懐かしい。

8．おわりに

任期中、日本では出会えなかったであろう、日本企業の方、スイスで暮らす日本人の方、日本人女性を配偶者とするスイス人男性など、多くの方と出会いました。苦労や難しさはさまざまありましたが、教員としての自分の立場を見つめ直し、視野の広い生き方をしている方たちから、たくましさや強さを学びました。

たくましさや強さは、日本人学校に通う児童生徒からも毎日のように感じていました。日本で暮らした時間は決して多くない児童生徒ですが、日本食をこよなく愛し、昼食時にはお弁当を食べながら「いますぐ、カツ丼を食べたい」「先生、好きな食べ物は何ですか？」と、日本食談義に花を咲かせたものです。

中 2 国語の教材で「盆土産」（三浦哲朗著）という作品があります。出稼ぎに出ていた父親がエビフライという作品設定当時まだ出回っていない珍しい食べ物を、冷凍保存に気を遣いながら持って帰ってくるというお話です。早くに亡くした

妻を思い墓参りをする場面は秀逸で、日本という国の情緒や美しさを感じさせるのですが、生徒の興味はすっかり「エビフライ」に移っていました。頬張ったときの「しゅわっ」という表現に、「先生、よだれがでてきて、もう読めません」と話すほどです。

遠く離れた日本を愛し、母国を遠く離れたスイスでも仲間とともに、たくましく生きている児童生徒達の存在は、いつも私を励ましてくれました。

赴任当初、先輩教諭から「自分で選んだ派遣の道。できるだけ自分のことは自分でやりたい。それでもできないときは、周りが手伝ってくれる」という言葉をお聞きし、まったくその通りと感じました。

スイス入国当初、住居や住民申請の手続きなどさまざまな場面で、当時の事務職員の方をはじめ、たくさんの方のお世話になりました。自分では何もできない無力さを感じる日々だったことを今も忘れることはありません。

日本に帰国するときには少しでも自分のことは自分でできるようにと思い、ドイツ語の学習を続けました。当初はアルファベットの読み方さえもわからず、塾に入っても「ドイツ語を習うのにドイツ語で教わる」ため、何度もくじけそうになりました。しかし、「これも派遣の財産だから」と言って貴重な時間を外国語（英語）の勉強にあてていた先輩教諭の姿を目にし、その姿を手本に自分を叱咤しながらこつこつ勉強を続けました。もちろん、本来の業務をしっかり行った上での語学の勉強ですから、どうしても塾に通えない夜もありました。まったく上達しない自分に情けなくなることばかりでしたが、入国時よりも少しだけ聞けるようになったり、出会った方と片言のドイツ語でコミュニケーションをとれたりというときには、わずかな喜びや達成感を味わいました。

3 年間通ったドイツ語塾でタイ、イタリア、フランス、レバノンなど、さまざまな国の方と出会いました。お互いに外国語であるドイツ語でのコミュニケーションとなりましたが、スイスで暮らしているのですから、文法は無視してでもドイツ語は話せるという方がほとんどです。せっかく話しかけてくれるのに、思ったことの 10 分の 1 も話せない自分がもどかしく、残念な思いを何度も味わいました。

ドイツ語を教えていただいた先生は、日本に大変興味がある方で、塾の終わりにはいつも私だけに起立して、一礼しながら「さよなら」とウインクしながら日本語で挨拶をしてくれました。

自分の国の言葉で挨拶をされる、という小さなことがとてもうれしく、コミュニケーションの第一歩は、つながりたいという気持ちであることも実感しました。

東日本大震災のときには、多くの方が「あなたのふるさとは大丈夫なの？」と心配していただきました。さまざまな国の方と一つの教室で出会ったことがきっかけとなり、自分が日本人であることをさらに自覚し、もっと日本という国に誇りをもちたいと思うようになりました。

多くの出会いに感謝し、今後も教員としての研鑽を積みたいと考えています。